

北海道の開拓と共に歩んだ

市立札幌病院

創立百三十周年を迎え、常に北海道の医療の中核として、また、自治体病院として地域医療を支え続けている、市立札幌病院を紹介します。

明治二年（一八六九年）、銭函に到着した島義勇^{しまよしゆう}官は、この地に仮役所を開設しました。そして、その片隅に設けられた診療所（仮病院）が、今日の市立札幌病院の始まりとされています。

三年（一八七〇年）、札幌本府建設が本格化したため、元村（東区北一三東一六付近）にも仮病院が設置されました。この時着任した医師が齋藤龍安^{さいとうりゅうあん}です。龍安は、上総国^{かずさのくに}（現千葉県東金市菱沼）出身で、島判官に随行した二人の医師の一人であり、札幌で最初の医師となりました。

やがて、この病院も手狭になったため、東創成町（北一東一）の官舎に移転します。しかし、この仮病院は待合室がなく、入院施設もなかったため、患者にとっては大変不便なものでした。このことを憂い

た龍安をはじめ医師たちは、開拓使に嘆願書を提出しました。そして、この要望は認められ、病室が新設されるなど、次第に改善されていきました。

四年（一八七一年）には、この病院に高山周徳^{たかやまのりとく}が着任しました。周徳はびぜん備前（現岡山市西大寺）



明治6年から23年まで使用された院舎の診療室（現在の札幌鉄道病院敷地内）、昭和55年、「北海道開拓の村」に移設・復元されました

の出身で、病死するまでの十年間、同病院の中心的存在として、また、副院長として、病院の発展に大いに貢献しました。

その後、病院は二十三年（一八九〇年）、北一西八



大正12年に施工した初代市立札幌病院本館

・九に移転します。当時の院長のグリーンムがこの場所を選んだ時、住民には「遠くて困る」と不評でした。しかし、グリーンムは「十年後の札幌は現在の札幌に非ず、幾倍もの大都市になるだろう」と変更しませんでした。

こうして設置された病院は、大正九年（一九二〇年）の火事で院舎の大半を失ったものの、十二年（一九三三年）には本館を再建し、戦前・戦後を通して、この地でその役割を果たしました。しかし、時の経過とともに院舎の老朽化や狭小化、市勢の進展などにより、移転・改築を迫られるようになりました。

そして、平成七年、桑園の地に最新医療機器を装備し、地域医療機関との連携を強化する一大総合病院として生まれ変わり、現在に至っています。

（平成十一年十一月号・第六十二回）